

## 第2回国際作物学会議に出席して

鯨 幸夫（金沢大学教育学部）

1996年11月17日から11月24日まで、第2回国際作物学会議がインドのニューデリーにて開催された。第1回目は1992年のアイオワ（米国）であるから、4年の歳月の短さを感じた。銃を持った警備員（警官？）にガードを固められた大会会場は、周囲の雰囲気とは別世界であった。レジストレーションから、トラブルに巻き込まれた。宿泊のホテルの違いによって受け付け会場が異なっていたのだが、私宛には、それを知らせるインフォメーションすら届いていなかったのだ。なおかつ、宿泊しているホテルからの宿泊名簿が受け付けに届いていないと、本人の確認ができないとの理由で、受け付けできない。あちこちで、苦情がでて、怒鳴り声すら聞こえるありさまであった。

プログラムを見て驚いた。申し込み段階の日程は完全に無視され、発表日程が大幅に変更されていた。それも、発表本人に何の連絡もなく。私は、初日に変更になっていた。学会は、各セクションに分かれたシンポジウムとポスター発表とで構成され、68ヶ国から1000人を超える参加者があった。大多数はインドからの出席者で占められ、次いでアメリカであり、日本からの参加者数は第3位であった。

ポスターセッションでは、ボードの空白が目立ち、これも事務局による日程変更が大きな原因と判断された。根に関する発表題数はさほど多くなく、チェックに行くと、空白といった例も何度か見受けられた。私は、生態系農業への戦略に関する内容でポスター発表を行なったが、ICARのDr. D. N. Singhと長いこと議論をした。隣接のボードの発表者も議論に加わり、かなり面白い話に展開した。しかし、根系調査の際の深さに関しては、私とかけ離れた認識をもっていたのが面白かった。30-35cmでは浅いのだそうだ。中国の場合においても、土中60cmの深さまでイネは十分に根を伸長させているのだそうです。高知大学農学部の本山由徳氏から聞いた、中国のイネの根に関する話を思い出し、心はいつしか、未だ見ぬ中国のイネの根の事を考えていた。

今学会では、ホテルの予約金を支払っているにもかかわらず宿泊がキャンセルされ、別の宿に回せられたり、実際の宿泊料金よりもパウチャーの料金の方が高額であったり、等、さまざまな場面でのトラブルの発生が見受けられた。正直に感想を述べれば、政治的な意味でインドで開催された学会、との印象を強く持った。エクスカーションの一環として、ニューデリー市内の研究機関を訪問する機械もあったが、圃場への立入りは認められず、個々の研究室を漫然と歩きながら、担当者の話を聞くだけにとどまっていた。今回の学会は、私にとって、これまでとは異なった意味での体験であった。